

日本学術会議公開シンポジウム（於日本学術会議講堂）  
「明治神宮の森－これまでとこれからの 100 年」  
挨拶

師走の慌ただしい中、多くの皆様にお集まりいただき、日本学術会議環境学委員会の主催、第 2 次明治神宮境内総合調査委員会の共催によって、日本学術会議公開シンポジウム「明治神宮の森－これまでとこれからの 100 年」が開催されるに当たって、日本学術会議を代表してご挨拶を申し上げます。

東京での生活体験のある人にとって、明治神宮は様々な場面で親しんできた、巖かで、心が洗われる、それと同時に、多くの楽しみを与えてくれた場所ではないでしょうか。間もなくお正月ですが、初詣に明治神宮に出かける方も多いでしょう。野球やサッカーの観戦に外苑の球場や競技場に出かけた事のある人も多いはずです。結婚式や種々のイベントで、明治記念館に招かれた方もいらっしゃると思います。もちろん、外苑でジョギングしたり、内苑で散策を楽しむ習慣のある方も少なくありません。

公園や緑地が少ないと言われ続けてきた東京ですが、御所、御苑、そして明治神宮を含めると、特に都心部にはかなり広いオープンスペースがあることが分かります。そして、その中でも最も人々に親しまれてきたのが明治神宮であることは疑いがありません。

私も、しばらくの間、ちょうど外苑と内苑の間に当たるような場所で暮らしたので、明治神宮を利用することに加えて、森の眺めや、鳥のさえずりなど近隣居住者ならではの楽しみを味わいました。勿論、東京の都市計画にとっても重要な場所です。だからこそ、新競技場の設計に関しても、オリンピックという一大イベントにも拘らず、森の景観を大事にするべきという議論を支持する人々が多いのだと思います。

学生時代だったと思いますが、森のない荒地に人工林を築いたのが明治神宮の造園だと聴いて驚いた記憶があります。今でこそ、まるで天然林のようにうっそうと茂った森が、1910 年代後半に林学や造園の第 1 線の研究者や実務家の知識と技術を集めて造られた人工林を基に、次第に自然林化していったものだという話は、人間の意思と知識の重要さと自然の営みの力強さを感じさせます。まさに、人の手で、高木からコケまでが繁茂する平衡状態を示す極相林（きょくそうりん）を創り出すことができるかという試みが明治神宮の造園であったのです。

そうした観点に立つと、人びとに様々な楽しみや安らぎの機会を提供する一方で、林学、造園学、シダやキノコを含む植物学、鳥や昆虫等の動植物学、土壌学等様々な分野の学術を動員して、明治神宮の変化を観察し、考察し続けることは日本の研究者の重要な役割といえるのだと思います。こうした観点から境内の調査は 50 年毎に、多くの研究者の参加によって行われてきました。今回、

創建 100 年を前に行われた大規模総合調査で、種々の新たな興味深い発見があったと伺っています。それらの一端が本日のシンポジウムで紹介されることを楽しみに来場された方も多いと存じます。

また、まとめには、これからの自然環境の持続可能性について、パネルディスカッションが行われるのも楽しみです。

総合調査には、約 150 人の専門家が参加し、ボランティアでの現地調査を行ったとのこと。改めて、第 2 次明治神宮境内総合調査委員会の委員長である中島精太郎明治神宮宮司、座長である進士五十八東京農業大学名誉教授をはじめとする、調査に参加されたすべての専門家の皆さんの御労苦をねぎらい、多くの成果をもたらして頂いたことに感謝申し上げます。

本日ご参加の皆さんが、このシンポジウムを有意義に楽しまれることを祈念して、私の挨拶といたします。

平成 25 年（2013 年）12 月 12 日（木）

日本学術会議会長 大西隆